

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
 〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
 TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
 発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ28】

J R 東日本革マル問題ウォッチャーとして特に気懸かりな問題 松崎氏の正体も何も、本当は全て知っている J R 東日本幹部役員の “ 異常な沈黙 ” の裏側

平成2年頃のことだが、当時、相当数の J R 東日本労政担当経営幹部たちが、J R 西日本及び J R 東海両社の労務政策を低く評して、「あのような単純な手法は少なくとも J R 東日本の考えでは “ 愚の骨頂 ” だ。あの連中（注、松崎氏及び J R 東革マル）には、アメ玉をしゃぶらせ、時間を十分にかけ、次第にキバが丸くなるように対応し、遂にはそのキバがなくなってしまう、というような遠大な計画が “ J R 東日本の対革マル戦略 ” である」と、自信満々の風情で語っていたという。

当時、松田昌士氏と非常に近い関係にあると見られていた人物は、本社課長から地方支社の総務部長に転任後の間もない頃、本社勤務時代の元部下3名を山間の温泉地旅館に極秘に呼び寄せ、意気軒昂で「山は必ず動くが、俺に着いて来る覚悟は出来ているだろうな…」等の “ 檄 ” を飛ばした、とも伝えられている。

ところが、平成4年頃には松田氏の “ 変心 ” が明らかになり、松田氏の「松崎氏への急傾斜」が目立つようになったため、ある中堅幹部が、本社、支社の部長数人に個別に、松崎氏及び J R 東労組一辺倒の J R 東日本労使関係の現状への危惧を具体的に述べ、それへの認識と対応策等について見解を求めたところ、その人々は異口同音に、次の趣旨の答えを返してきたという。

【今の J R 東日本には、国鉄時代の「本社採用」（大卒・キャリア組）のような使命感も人間関係も残っていない。もはや、“松崎体制”を最前提にして何事も考えるしか自分たちが生き残れる道はないのだ。これは間違いなくわれわれ（注、旧本社採用キャリア組）の共通した認識である。したがって、貴方の考えは正しいし、全く同じ認識だが、“どうすることもできない”というのが、今の私の正直な気持ちだ】

これはまったくの「実話」である。松崎氏の正体、J R 革マル組織の存在、などについて住田、松田両氏をはじめ、J R 東日本経営幹部が知らない筈はないということは、本書でも繰り返し述べてきた。上掲の J R 東日本の本社や支社部長たちの “ 異口同音 ” 的述懐も、先の「J R 東日本経営幹部秘密発言メモ」なる怪文書の内容も、そのことを十分に裏付けて余りあるものだ。

松田氏の “ 変心 ” も含め、一体なにがそうさせたのかを考えると、この種の問題で、巷間しばしば囁かれているところの「革マル派非公然部隊の盗聴、盗撮、侵入、窃取等の非合法活動」が、その辺りに関係しているのではないかとの拭い難い疑念が湧いてきてならない。

< J R 東日本労政『二十年目の検証』200ページから201ページより抜粋 >

民主化の声・声・声・・・

2005.12.16 その28

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (8)

～佐藤正雄氏失踪事件と、さつき会経理偽装問題～



* 2003年の夏も終わる頃になった。警察の大元包囲網は、さらに絞られていた。鉄道連合や北本州鉄道労組の関連会社の家宅捜査で、入手した資料を分析した警察は自信を深めていた。大元が君臨している鉄道連合や北本州鉄道労組や関連会社の資金を、あれこれの理由をつけてはいるが、私的に使用している点がハッキリしたからである。

(p . 138)

* 大元が使用している国内外にある別荘のうちいくつかは、大元が指示して建築をさせたが、大元の所有ではなく鉄道連合や北本州鉄道労組の関連会社の所有としてある。ただ、大元が自由に使用できるように会社の役員会で確認していた。これらを実際に統括しているのは、大元の側近で金庫番でもある福祉協会理事長の武藤である。警察は武藤にも参考人として呼び出しをかけていた。

(p . 138 ~ 139)

* 鉄道連合の関連事業体はいくつかある。椿商事株式会社もその一つでオーナーは大元である。「解雇者が飯を食えるようにするため関連会社をつくるのだ」とかねてから大元は側近たちに言っていた。しかし、「椿商事」の十数人の社員のうち解雇者は二人のみで、あとの社員は大元のファミリーや、その友人や組合員OBである。オーナーである大元への忠誠から、次第に社員として入社した息子への追従体質がつくられていった。鉄道連合や加盟労組が、次々と大元の息子に新しい組合歌の制作を依頼したのも、その表れの一つである。やがて武藤を中心に大元の息子を社長にしようとする動きが出て来た。・・・2002年の春に大元の息子は、役員会の議を経て正式に社長になった。(p . 141 ~ 144)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【2003年の夏も終わる頃、警察は大元(M氏)が鉄道連合と北本州鉄道労組及びその関連会社の資金を私的に使用している事実を突き止め、大元(M氏)包囲網を絞りつつあった。そして、大元(M氏)の側近で金庫番である武藤(S氏)・福祉協会理事長を参考人として呼び出しをかけていた。国鉄改革当時、内ゲバ襲撃で身体不自由者となった武藤(S氏)は、その後、自分を捨て、ひたすら大元(M氏)に忠誠を尽くすことによって福祉協会理事長の地位に就くことができ、大元(M氏)の信頼と庇護の下、“金庫番”に据えられていたのである。】

2003年9月、警視庁公安部は、JR総連組合員の暴力行為法違反容疑の関係先として、(財)日本鉄道福祉事業協会が契約している貸金庫やJR総連関係者の自宅など5箇所を家宅捜索し、貸金庫から土地の権利証や登記簿などを押収した、ことは事実である。そして、JR総連・東海労の情報によると、鉄道福祉事業協会の佐藤正雄理事長宅にも家宅捜索が入ったようだ。大元(M氏)の金庫番宅に警察の手が入ったことで、事態は急展開した。

民主化の声・声・声・・・ (続く)